

「放 浪 癖」

布引支部 早瀬 淳一

山の会に集まってこられる方々の理由はさまざまだろう。私のそれは大げさにいうと放浪癖のような気がする。とにかく家にじっとしているのが苦手。「ステイホーム」の今のご時世はまことに居心地が悪い。そこで我慢してステイホームしながら、わが放浪癖を振り返ってみた。

小さい頃から知らない道を行くのが好きだった。小学校3年生くらいのとき、仲間3、4人で家から歩いて30分くらいのところにある丘陵にたまに行った。昭和40年ころの吹田市だったが、まだ山林地帯が残っていて蛇もいた。山林の中をでたらめに歩き、知らない道を迷いながら帰ってくることにワクワクした。今の世の中なら親が許してくれないだろうが、うちの親はほったらかしだった。大人になってその辺を車で走ったが、見事に住宅地になっていた。

中学生になってからの読書も探検ものが多かった。「ロビンソン・クルーソー」、「宝島」、「海底2万里」など。そして高校生になって読んだ「なんでも見てやろう」（小田実）が私の放浪癖に火をつけ、社会人になって読んだ「深夜特急」（沢木耕太郎）が火に油を注いだ。そんなことで、大学時代はバイクで国内を走り回っていたが、就職した1年目・37年前の夏、満を持して海外初放浪のインドへと旅立った。



インド国旗



インド国章

当時、「地球の歩き方」が発刊されたばかりの

ブックだが、その頃はいかにも手作りのミニコミ誌の趣だった。まち歩きマップも手書きでそれがまた読者の想像力を刺激した。往復の飛行機はシンガポール航空だった。飛行機代は昔のほうが高く、25万円くらいしたように思う。そして今は考えられないと思うが、帰りの予定日の4、5日前までに現地の航空会社のオフィスで「レコンファーム」という予約の再確認をしつこいくらいしておかないと、簡単に座席の予約を外されるのだった。それで予定の帰国便に乗れなかったという話をよく聞いた。それは置いて、初めての飛行機に舞い上がり、スチュワーデスがきれいでこっそり写真を撮ったり、「オレンジジュース」の英語のオーダーが通じたことに喜んだり、今から思えば馬鹿の田舎者である。



コルカタ（カルカッタ）

カルカッタ空港に降り立った。今のインドは随分発展し綺麗になったと聞くと、37年前のインドである。空港のロビー中から、カレーと埃の匂い、インド人の汗と体臭の匂いが押し寄せてくる。カルカッタ市街の歩道上にはいたるところにホームレスの男女が寝そべっていた。

放浪にこだわったので1日目の宿も飛び込み。「地球歩き」の安宿の案内のページをほぼ暗記していたので、迷わずサダル・ストリートのほぼ最安値のゲストハウスに部屋を取った。当時の値段で150円くらいだった。シングルベッドが1つだけ、あとは何もなし、の監獄のよう

な部屋。壁はあるが（当たり前だ）、四角い壁と三角の天井の隙間に壁がないので、夜はそこからフツーに蚊が入ってくる。薄汚れたシーツを頭からかぶり、汗だくになって寝た。でもそこは若さ、それでも無性に楽しかった。屋外のホテル敷地に出て、ベンチでビールを飲みながら、白人の旅人と話をした。当時の旅人は「いかに安くあげたか」と「いかに危険な目にあったか」の自慢比べをした。私も安さの追求はしたが、危険さはゴメンだった。

昼間はとにかくよく歩いた。街の大まかな地図を頭に入れて、初めての道をひたすらブラブラする。市場は何度も訪れたので、店の人と顔なじみになったほどである。インド人の英語の発音は独特で、「th」を「ト」、「R」を舌を巻いて「ルルー」と発音するので最初はわかりにくかったが、徐々に慣れていった。インド人はやたらと人懐こく（ずうずうしく）、ひとりで歩いているとすぐに話しかけてくる。



そのほとんどは金儲けのために、「何々を買え」、「街を案内してやる」、「リキシャ（人力車）に乗れ」、と気がつけば5人くらいのインド人を引き連れて歩いている。

移動は長距離列車にしたが、切符を買うのがまたひと苦労。インドはやたらに人が多いから列に並んで窓口にたどり着くまで30分くらいかかる。窓口でまごまごしていると後ろの人々が怒り出すので、また最後尾に並ぶことになるらしいので必死である。行き先、日時を紙に大きく書いて差し出し、無事買えた。自由席でもみくちゃんになりたくないなので、奮発して1等席にした。2段ベッドの寝台席なのは良かったが、上の段だったので夜寝るとき天井からエアコンの冷気が吹き付けてきて一晩寒さに耐えた。

そんな調子でカルカッタからバラナシ（ガンジス川での沐浴で有名）、デリーと移動し、2週間後帰国便に乗った。その間のことを書いているととてつもなく長くなるのでまたの機会にするが、それ以降も独身の間は毎夏あちこちの国を放浪した。

さて結婚し子育て期間になると、もちろん放浪もしてられない。家族で夏、バンガローを一棟借りして泊まるくらいである。そして子供が手を離れてから山の仲間と出会い、山に登るようになった。



前から2列目・右端が筆者（シェール槍にて）

数年の間は集団での山歩きだったが、この1年ほどは一人の山歩きにハマっている。その魅力はたくさんの方がご存知のとおりだが、私はできるだけ知らない道をプチ放浪することである。今はコロナの渦中だが、日常が戻ればまたひよこの仲間たちと集団山歩きを楽しみたいし、ひとり山歩きももっと重ねたい。ひとり山歩きの話をすると、「奥さんと二人でいかないのですか？」と聞く人がいるが、今のところつき合ってくれそうにない。その理由は秘密である。

令和2年5月14日 記